2007 年 7 月 18 日発行

# 人社研ニュースレター

## 第 17 号

**発行者**
千葉大学大学院
人文社会科学研究科
phone/fax 043-290-3574
sshassist@shd.chiba-u.ac.jp

平成 18 年度後半期学位授与式

目次

| | |
|---|---|
| 巻頭辞 | 1 |
| 平成 18 年度後半期学位授与式 | 2 |
| 新規科目担当者 | 3 |
| 所属教員による出版物 | 3 |
| 科学研究費（新規）プロジェクト | 6 |
| 受賞 | 8 |
| 専任教員業績 | 8 |
| 社文研・人社研院生の研究業績 | 10 |
| 平成 19 年度前半期全体研究会のお知らせ | 12 |
| 平成 19 年度紀要刊行予定 | 12 |
| 大学院学務グループからのお知らせ | 12 |

# 就任から 100 日（任期満了まで 20 か月強）

研究科長　三宅明正

私事で恐縮であるが、わたくしの両親は二昔以上前に他界した。ふたりが残した「遺言」は、「おまえは粗忽者であるから、ぜったいにチョウのつくことをしてはいけない」であった。以後私は言われたことを守り、学科「長」や学会の企画委員「長」など、基本的に輪番制のものは別として、それこそ盲「腸」にもならずに何とか過ごしてきた。

ところが今回どうしたわけか、人社研の科「長」という役職に選出されてしまった。これを逃れる手だては何かないかといろいろと調べてもらったのだが、周囲からはそうした行為を非難され、また国立大学法人になってから各大学内での投票が軽く扱われる傾向（その端的な表れは、各大学における学長選考の仕組みであろう。一般に選挙は「意向投票」となり、選考会議がその「意向」をどの程度ふまえるかが、現実に争点になっている大学がある）を好ましくないと考え、ともかく、研究科長職につくことになった。期間は2007年4月1日から、2009年3月31日までである。

先日、学長・理事と人社研教員との懇談の機会があり、「平成19年度重点実施事項課題及び部局改革の方向性」や「学長・理事等への質問・要望」などを提出するよう求められたので、後期課程専攻長の意見をうかがいながら、以下のようにまとめてみた。

重点事項は3点で、「１　博士前期課程・後期課程それぞれの位置づけを明確にしつつ、両者を一体とした運営体制（教育、研究面のそれを含む）を構築する。２　運営費交付金に基づく経常的経費の維持・増額を関係各機関に働きかけつつ、競争的外部資金の獲得を積極的にはかる。　３　21世紀ＣＯＥプログラムによる研究活動を遂行するとともに、グローバルＣＯＥ応募の準備活動を推進する」とした。

１は2006年度から発足した、前期・後期区分制大学院の実質化である。前期課程は前身が文学研究科・社会科学研究科に分かれていたので、その時代の慣行がなお強いが、後期課程との関係を含めて、できるだけ速やかに人社研としての体制を整えていきたい。

2は、ややもすれば近年、外部資金の重要性ばかりが強調されるが、基本的な活動がきちんと行えるように、私たちも千葉大学本部と足並みをそろえて取り組んでいきたいということである。

3は、いまのＣＯＥ事業担当者によるとりくみを、研究科全体で支えていくことの重要性と、新たなＣＯＥ計画に挑戦する姿勢を示したものである。今回人文科学分野での申請は残念ながら採用されなかったが、2008年度の社会科学もしくは広領域等では、ぜひとも採択をめざしたい。

他方、学長・理事への要望として2点をあげた。一つは、院生への直接的な支援を、少数者に重点的に行うよりも、浅くても数多くの院生を対象としたものにしてほしいということ、いま一つは、今日国立大学でおきている「評価疲れ」といわれる現象、例えば各種の会議や書類提出など、繁忙さの緩和を、ぜひ考えていただきたいということであった。

言うまでもなく大学・大学院の基本活動は、研究とそれに基づいた教育である。せっかく競争的な外部資金＝研究費を獲得しても、それを使って研究する時間が乏しくなり、学生、院生と接する時間が減っていくといった事態がおき、続くならば、それは本末転倒以外の何ものでもない。

## 平成 18 年度後半期学位授与式

2007 年 3 月 26 日（月）、社会文化科学研究科科長室に於いて学位授与式（左写真）が行われ、7 名の方が社会文化科学研究科を修了し、学位を取得されました。また、3 名の方が論文提出により学位を取得されました。

課程博士　7 名

| 氏名 | 論　題 | 取得学位 |
|---|---|---|
| 崔昌玉 | 現代朝鮮語のヴォイス接尾辞について―音韻論的、形態論的、統辞論的、意味論的観点を中心に― | 博士（文学） |
| 長谷川亮一 | 十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策―いわゆる「皇国史観」の問題を中心として― | 博士（文学） |
| オルトナスト | オボー祭祀―ウジムチン地域の祭祀文化に関する文化人類学的研究― | 博士（学術） |
| 中村隆文 | ヒューム主義は何を語り得るか―情動主義の背景にある世界観とは― | 博士（文学） |
| 竹田智志 | マンション建替え制度及びその実態に関する研究―団地型区分所有建物を中心として― | 博士（法学） |
| 仲松優子 | 18世紀ラングドック地方における司法制度改革と権力秩序―ヴィヴァレ・セネシャル裁判所創設とマスクの蜂起― | 博士（文学） |
| ホビスハラト | 中国の農村集団土地所有権の再構成論 | 博士（法学） |

論文博士　3 名

| 氏　名 | 論　題 | 取得学位 |
|---|---|---|
| 松井 美知子 | 消費者信用における利息制度の法的考察 | 博士（法学） |
| 浅田進史 | 膠州湾租借地におけるドイツ植民地統治と社会秩序 | 博士（学術） |
| 高森哉子 | 代理法の研究――イギリス代理法と日本代理法の比較 | 博士（法学） |

## 新規科目担当者

平成 19 年度の新規科目担当者は以下の通りです。（専攻、教育研究分野順）

**博士後期課程**

**〇公共研究専攻**

**小谷　真吾**准教授（公共哲学）
「環境人類学」

**大石　亜希子**准教授（公共政策）
「雇用政策論」

**田口　善久**准教授（共生文化）
「ユーラシア言語論」

**〇社会科学研究専攻**

**松村　良之**教授（法学）
「法社会学」

**博士前期課程**

**〇地域文化形成専攻**

**久保　勇**助教（記録情報）
「地域伝承資料論」

**岡部　嘉幸**准教授（言語行動）
「日本語構造論」「日本語構造論演習」
「特別研究Ⅰ」「特別研究Ⅱ」

**〇公共研究専攻**

**高光　佳絵**助教（公共思想制度研究）
「東アジア国際政治史」

**石原　俊**助教（共生社会基盤研究）
「現代社会変動論」

**〇社会科学研究専攻**

**鳥山　泰志**准教授（法学基礎理論）
「民法・物権法」「民法・物権法演習」
「特別研究Ⅰ」「特別研究Ⅱ」

**各務　和彦**講師（経済理論・政策学）
「数理統計学」「個別課題研究Ⅰ」
「個別課題研究Ⅱ」「個別課題研究Ⅲ」
「リサーチペーパー作成指導」

**田村　高幸**助教（経済理論・政策学）
「経済数学Ⅱ」

## 人社研担当教員による出版物

**広井良典・沈潔編著『中国の社会保障改革と日本——アジア福祉ネットワークの構築に向けて』ミネルヴァ書房、329頁、2007年3月。**

中国が現在大きな社会変動の只中にあり、それが日本を含めアジアそして世界全体に大きな影響を及ぼしていることはあらためて確認するまでもない事実である。特に「市場化」の急速な展開、都市－農村の不均衡発展などの中で経済格差の拡大が急激に進んでおり、社会保障システムの整備・改革が最大の課題の一つとなっている。一方、一人っ子政策の影響等の下で、急激な少子・高齢化が進行中であり、いわば“21 世紀の地球高齢化問題”が中国を中心に展開することが確実に予測されている。

しかしながら、中国の社会保障改革について、制度の紹介等を超えて、より大きな文脈や理念、日本との比較を含め包括的に分析し論じた書物は、皆無とはいわないまでもなおきわめて限られ

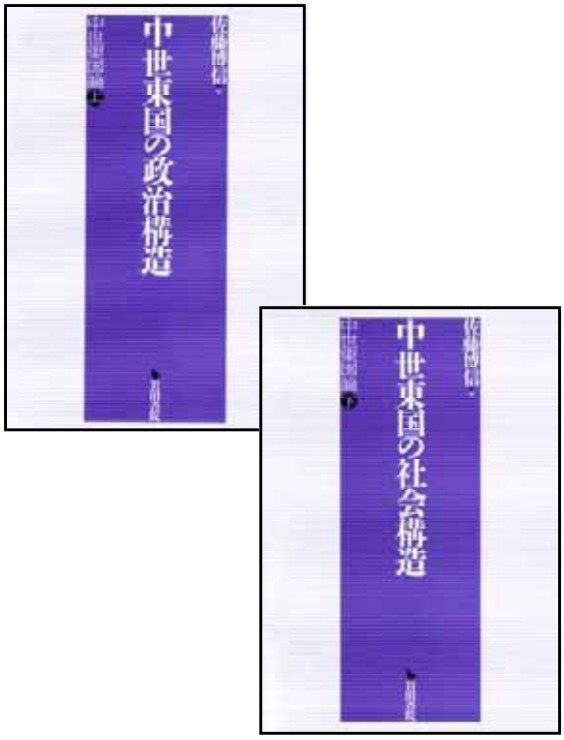
たものにとどまっている。本書は、このテーマに関する日本・中国の研究者・実務家が協力する形で、中国の社会保障改革及び関連する政策展開を、その理念と政策のダイナミックな展開にそくして論ずるとともに、日中比較及び日本にとっての意味、日本との国際協力のあり方、ひいてはアジアにおける一国レベルを超えた社会保障／福祉国家の可能性等について、新たな視座と展望を提示することをめざすものである。

具体的には、第一部（全体像と理念）において本書全体のベースとなる問題設定の枠組み等が示されるとともに、「（アジアにおける）公共性」や「複層的福祉」といったテーマが論じられる。続く第二部（中国における社会保障改革の展開と日中比較）では、中国と日本の社会保障に関連する重要な領域が、社会保障政策の基本理念と展開、「都市－農村の格差」問題、ＮＰＯや市民社会の展開、医療政策及び改革の動向、家族・コミュニティと福祉のあり方といった論点にそくして論じられる。最後の第三部（日中協力のあり方と展望）は、中国と日本の「社会保障国際協力」のあり方について、実務ないし実践の視点をも含めた論述が展開される内容となっている。

本書は千葉大学 21 世紀 COE プログラム「持続可能な福祉社会に向けての公共研究」での研究会等の積み重ね等が基礎となっている他、国際協力機構（JICA）の中国農村養老保険整備協力プロジェクトへの編者の関わり（2005 年 1 月に精華大学で開催された日中合同の「中国農村社会保障セミナー」等を契機とする同年から翌年までの事前調査、2006 年からの本格調査等）等の成果を踏まえたものとなっている。

（本研究科教授　廣井良典）

**佐藤博信編著『中世東国の政治構造　中世東国論上』・『中世東国の社会構造　中世東国論下』岩田書院、上巻305頁・下巻335頁、2007年6月（A5判、各¥6,900＋税）。**




編者の専攻する日本中世東国史の研究は、近年様々な分野で飛躍的な発展を遂げている。中世東国の名称を冠する書物が相次いで刊行されていることにも、それが窺われる。編者は、千葉歴史学会中世史部会で同学の士とともに、研究を進めてきた。すでに同学の士と『中世房総の権力と社会』(高科書店、1990 年)と『中世東国の地域権力と社会』(岩田書院、1996 年)を編集し出版してきた。研究成果を公表し社会的評価をえたうえでさらなる前進を図るという方針で各自研究を進めてきた。後者の論文集を発刊してから十年の歳月が流れた。この間に研究状況も激変した。同学の士は、そうしたなかで着実な研究を続けてこられた。その研究成果がこの 2 冊の論文集に集約された。鎌倉時代の日蓮に始まり近世初頭の徳川氏にいたる、政治・宗教・権力に関わる 22 人の書き下ろし原稿からなる。当大学の関係者は四人にすぎず、そのほとんどは研究会を通じて学ぶ同士たちである。しかも、その多くの方々が高校教師・大学院生・博物館学芸員・文書館職員である。その方々が力の籠もった論文を寄稿されたのには、編者と

して驚嘆するところであった。その研究力が中世東国史研究そのものを底上げするものであった。論文の評価は、その人の肩書きではなく論文の中身にあることを改めて痛感した次第である。なお、小生は年長ということで、編者を委嘱されたが、論文執筆者の特定から依頼、そして編集は別個組織された編集委員会が独自に行ったもので、小生はそれらに一切関与していない。そうした論文集であることを承知してお読み頂ければ幸いである。

（本研究科教授　佐藤博信）

**中川裕・中本ムツ子（共著）『カムイユカラでアイヌ語を学ぶ』（ＣＤ付）白水社、2007年5月。**

中本ムツ子氏は1928年千歳市生まれのアイヌ人であり、同市のみならず北海道全体のアイヌ文化振興運動の中心的人物である。1997年にこの中本氏との共著で、世界初の実用的なアイヌ語独習書『エクスプレスアイヌ語』を白水社から刊行した。同書はアイヌ語というあまり一般的でない言語の語学書でありながらかなりの売れ行きを見せ、それを修了した人向けの続編を希望する声も多かった。そこで10年を経て再び同じコンビで書き上げた中級者向けアイヌ語独習書が本書である。ただし中級者向けといっても、『エクスプレス』より到達レベルを上げてあるということであり、まったくの初心者でも本書から始められるように工夫してある。『エクスプレス』は基本的に作例による会話スキットが中心だったが、本書は前半で昔から伝承されてきたおまじない、鳥の鳴きまね、遊び歌、お祈り、なぞなぞ、輪唱、即興歌、子守歌などを題材にしてアイヌ語文法の基礎を学習し、後半でカムイユカラと呼ばれる比較的長い物語を１篇暗誦しながら、さらに高度な文法を学べるようにしてある。すなわち、アイヌ語学と同時にアイヌ口承文芸の概要に触れることもできるようにもなっている。例文も作例を極力抑え、伝承文学のテキスト中から選び出した実例を用いている。また付属のＣＤでは、中本氏と妹の住山頼子氏が吹込みを担当しているが、カムイユカラのテキストとしてとりあげたアトゥサ　チロンヌプ「裸のキツネ」は、中本氏が長年公演のレパートリーとしてきたお得意の演目である。アイヌ口承文芸のテキストは現在でも原文対訳や音声データ付で次々に刊行されており、今後もその数は増していくだろうと思われる。そのテキストをアイヌ語原文で味わい、アイヌ文化をより深く理解できる人々が、本書を通じて何人も生まれることを期待している。

（本研究科教授　中川裕）

**服部龍二・土田哲夫・後藤春美編『戦間期の東アジア国際政治』中央大学出版部、615頁、2007年6月（A5判、¥7,300+税）。**

本書は戦間期の東アジア国際政治をテーマとする論文集であり、本研究科の後藤春美准教授が編者の 1 人となっている。2004 年 4 月から 2007 年 3 月まで 3 年間にわたる中央大学政策文化総合研究所における共同研究の成果として刊行された。

時系列的に「第一次大戦後」、「柳条湖事件から盧溝橋事件へ」、「日中全面戦争」という三期に区分されているが、第一次大戦期や太平洋戦争期を部分的に含むものであり、以下の 12 本の論文から構成される。田島信雄「孫文の『中独ソ三国連合』構想と日本　1917-1924 年」、李熒娘「原内閣期における朝鮮の官制改革論」、簑原俊洋「排日運動と脱欧入亜への契機」、後藤春美「国際連盟の対中技術協力とイギリス　1928-1935 年」、服部龍二「満州事変後の日中宣伝外交とアメリカ」、樋口秀実「1935 年中国幣制改革の政治史的意義」、土田哲夫「国際平和運動と日中戦争」、高光佳絵「ホーンベック国務省政治顧問の対日強硬化とアメリカの日中戦争観　1937-1938 年」、高橋勝浩「日中開戦後の日本の対米宣伝政策」、加藤陽子「興亜院設置問題の再検討」、服部聡「有田八郎外相と『東亜新秩序』」、深町英夫「贅沢な用心棒？」。

本書は、共同研究の強みを生かし、日本、アメリカ、イギリス、中国、旧ソ連、ドイツなどの各方面から複雑な多国間交渉や内部動向を丹念に読み解き、立体的な歴史像を構築しようとする試みであると言える。

（本研究科助教　高光佳絵）

## 科学研究費（新規）プロジェクト

専任教員の 2007（平成 19）年度新規採択は以下の 4 件でした。

1）代表者
2）予算額
　07 年度（間接経費）・08 年度・09 年度
3）概要
4）研究分担者（所属）

### 基盤研究（B）
### 「インドにおける消費パターンの変動と経済成長、1950-80 年：中下層階層を中心に」

1）柳澤悠
2）270 万(81 万)・230 万・100 万
3）本研究は、1950 年代から 1980 年代までの時期における、インドの中・下層階層の消費パターンの変化を、村落でのフィールドワークや、栄養調査・消費嗜好調査、新聞広告、映画などの分析によって析出して、1980 年代以降のインドの持続的経済成長の市場的基盤を明らかにする。
4）井上貴子（大東文化大学国際関係学部教授）、杉本良男（国立民族学博物館教授）、杉本星子（京都文教大学人間学部教授）、粟屋利江（東京外国語大学外国語学部教授）

**基盤研究（B)**
**「『もの』とイメージを介した文化伝播に関する研究　―日本中世の文学・絵巻から―」**

1）池田忍
2）630 万(189 万)・410 万・240 万
3）絵画作品（絵巻)、および文学・記録の中に、中世日本社会の日常生活や、行事・儀礼の場を構成していたさまざまな「もの」やイメージ（絵）の実態を探ることを目的とする。それらが、地域や社会階層を越えて伝播し、中世文化が形成されていく過程を明らかにしたい。
4）柴佳世乃（千葉大学文学部)、久保勇（千葉大学人文社会科学研究科)、伊東祐子（都留文科大学)、亀井若菜（学習院大学)、土屋貴裕（研究協力者　日本学術振興会特別研究員ＰＤ　東京国立博物館　千葉大学大学院博士課程単位取得退学）

**基盤研究（C)**
**「日米における憲法政治――共和主義的公共哲学を中心として――」**

1）小林正弥
2）210 万(63 万)・140 万
3）本研究は、マイケル・サンデルに代表される現代アメリカの共和主義的理論と比較しながら、日本の憲法政治・憲政・立憲主義を多角的に検討し、主権・人権・平和・自由・平等・正義・公共性といった概念についての実践的な理論を構築していくものである。
4）金原恭子（千葉大学大学院専門法務研究科教授)、一ノ瀬佳也（千葉大学大学院人文社会科学研究科 COE フェロー）

**基盤研究（C)**
**「啓蒙前期の地下文書と政治新聞における神の正義論解体」**

1）三井吉俊
2）120 万(36 万)・110 万・110 万
3）啓蒙前期の地下文書と政治新聞を資料体として、「神の正義」の欺瞞性の自覚、宗派的教義に立脚する非寛容の理論の解体を、「ヨーロッパ意識の危機」期における宗派的・政治的ジャーナリスムの中に跡付ける。
4）なし

兼担教員についての本年度新規採択状況は以下の表の通りです。

| 研究種目 | 代表者 |
|---|---|
| 若手Ｂ | 岡部嘉幸 |
| 若手Ｂ | 笹倉宏紀 |
| 若手Ｂ | 金子敬明 |
| 若手Ｂ | 魚住弘久 |
| 若手Ｂ | 大鋸崇 |
| 若手Ｂ | 内山哲彦 |
| 基盤Ａ一般 | 松村良之 |
| 基盤Ｂ一般 | 土屋俊 |
| 基盤Ｂ海外 | 吉田睦 |
| 基盤Ｃ一般 | 高橋久一郎 |
| 基盤Ｃ一般 | 上村清雄 |
| 基盤Ｃ一般 | 田中慎 |
| 基盤Ｃ一般 | 石戸光 |
| 基盤Ｃ一般 | 大石亜希子 |
| 基盤Ｃ一般 | 佐藤栄作 |
| 基盤Ｃ一般 | 犬塚先 |
| 基盤Ｃ一般 | 實森正子 |
| 基盤Ｃ一般 | 木村英司 |
| 基盤Ｃ一般 | 藤田剛志 |
| 萌芽 | 岩城高広 |

※ 記載漏れがございましたならば次号に掲載しますのでお知らせください。

## 人社研専任教員・大学院生の
# 受賞
2007年1月～6月

時實早苗（本研究科教授）
　**福原賞**（福原記念研究助成基金出版助成）、2007 年 1 月。

海田皓介（本研究科博士後期課程）
　**千葉大学学業成績優秀者学長表彰**、2007 年 3 月。

## 人社研専任教員業績
2007年1月～6月

**著書・論文**

中川裕・中本ムツ子『カムイユカラでアイヌ語を学ぶ』白水社、2007 年 5 月。

中川裕「アイヌ語教育の未来―「アイヌ文化振興法」制定から 10 年。これから何をなすべきか」財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『平成 18 年度　普及啓発講演会報告集（2006.10.21　東京国際フォーラム講演会講演記録）』2007 年 3 月。

中川裕「金田一京助『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』」『日本語学』４月臨時増刊号「日本語学の読書案内…名著を読む…」明治書院、2007 年 4 月。

NAKAGAWA Hiroshi and OKUDA, Osami, Nivkh and Ainu, O.Miyaoka, O.Sakiyama and M.E.Krauss eds., *The Vanishing Languages of the Pacific Rim*, Oxford, 2007.

広井良典・沈潔編著『中国の社会保障改革と日本――アジア福祉ネットワークの構築に向けて』ミネルヴァ書房、2007 年 3 月。

野沢敏治「趙漢珪『自然農業』と東アジア農民共同体」『ＥＵと東アジアにおける超国家的・地域間的市民社会形成の比較理論研究』（2005 ～ 2006 年度科学研究費補助金報告書）、2007 年 2 月。

野沢敏治「資料・調査 1983 年 4 月以降の平田清明著作目録」『千葉大学経済研究』第 21 巻第 4 号、2007 年 3 月。

時實早苗「地図的想像力」『フォークナー』6 号、松柏社、2007 年 4 月。

小林正弥「新しい時代の自己観と公共認識」姜尚中、上田紀行、小林正弥、村上陽一郎『変わりゆく社会―著名人が語る<知の最前線>―』リブリオ出版、2007 年 4 月。

小林正弥「日中における公共性と福祉」広井良典・沈潔編『中国の社会保障改革と日本』ミネルヴァ書房 2007 年 3 月。

小林正弥「オリエンテーション　地球的福祉の実現に向けて～公共哲学と国際的貧困問題」小林正弥、上村雄彦『世界の貧困問題をいかに解決できるか～「ホワイトバンドの取り組みを事例として」　千葉大学講義録』現代図書、2007 年 5 月。

小林正弥編『シンポジウム報告書　文明論・環境倫理・公共哲学』千葉大学大学院人文社会科学研究科・21 世紀 COE プログラム「持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点」千葉大学大学院人文社会科学研究科・研究プロジェクト「『場所の感覚』の総合政策的検討」、2007 年 5 月。

Masaya Kobayashi, ‘ Spiritual and Perpetual Revolution for Democracy: The public Philosophy of

Maruyama Masao and His Mentor Nanbara Shigeru ’, Edited by Prof. Dr. Wolfgang Seifert, *Conference "Aspects of Democracy" September 21 and 22, 2006, Publications of the Japanese-German Center Berlin*, vol25, 2007.3.

Masaya Kobayashi, ‘ Special Feature I: Cambridge Moment: Developing the Civic Humanist Paradigm: History of Ideas and Public Philosophy, *International Journal of Public Affairs*, Vol.3, 2007.

石原 俊「主権・接触領域・秩序形成――法の“波打ち際”から“近代”考えるための社会学的試論」西川長夫編『グローバル化の過程において一国民国家を越境する公共圏の諸相――「植民地」と「都市」を軸とする比較歴史社会学的研究』科学研究費補助金成果報告書、2007 年 3 月。

高光佳絵「華北分離工作をめぐる国際関係―米国国務省極東部の政策転換―」『国際政治』第 148 号」2007 年 3 月。

高光佳絵「1930 年代における経済的相互依存をめぐるアメリカの認識―『グローバリゼーション』と東アジア国際関係―」『千葉大学人文社会科学研究』、2007 年 3 月。

高光佳絵「ホーンベック国務省政治顧問の対日強硬化とアメリカの日中戦争観　1937 ― 38 年」服部龍二・土田哲夫・後藤春美編『戦間期の東アジア国際政治』中央大学出版部、2007 年 6 月。

## メディア・報道

三井吉俊（本研究科教授）
「日本翻訳出版文化賞」『読売新聞』2007 年 3 月 16 日（資料 1 参照）

中川裕（本研究科教授）、田村雅史（本研究科博士後期課程）
「道東のアイヌ語テープ大量発見」『北海道新聞』2007 年 3 月 26 日

・　資料 1

日本翻訳出版文化賞
本県ゆかり石川、三井両教授
「ジャン・メリエ遺言書」
138年ぶり20年以上かけ

小林正弥（本研究科教授）
「国民投票法に関する大学人ネットワーク記者会見」『東京新聞』、『朝日新聞』（資料 2 参照）『千葉日報』2007 年 5 月 12 日
「同インタビュー」『朝日新聞・千葉版』2007 年 5 月 15 日
「平和への大結集・千葉　参議院選熟議討論集会」『朝日新聞』2007 年 6 月 30 日

資料 2

国民投票法 成立
「拙速」懸念の声
「日本の分岐点」
「内容は改憲促進法」
「時代変化に対応を」

## 社文研・人社研博士後期課程
## 大学院生の研究業績
## 2007年1月～6月

Akiko Kudo, ‘ A study of Japanese “ rareru ”-form acquisition comparing L1 with L2 acquisition- ’ , 小倉美知子編『二つの言語があうとき－言語教育・比較言語学・歴史言語学の立場から－』（千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第 141 集）、2007 年 3 月。

工藤昭子「多言語環境にある子どもの新出語彙の受容および修正過程」『東京経営短期大学紀要』第 15 巻、2007 年 3 月。

Akiko Kudo, ‘ A case study of language choice by multilingual referring to linguistic recency and linguistic distance- ’ ,研究成果報告書『多言語併用環境における日本語の習得、教育、及び支援に関する研究』平成 16-18 年度科学研究費補助金研究基盤研究(B)(2)課題番号 16320066 研究代表者 長友和彦、2007 年 3 月。

藤方博之「後期堀田氏家臣団における縁組手当金について―大名家臣の「家」を考える素材として―」『佐倉市史研究』20、2007 年 3 月。

藤方博之「大名家臣の『家』研究の必要性」『千葉史学』50、2007 年 5 月。

田村将人「白浜における集住政策の意図と樺太アイヌの反応」『北海道開拓記念館研究紀要』第 35 号、2007 年 3 月。

田村将人「『サガレン新聞』(1921-1924 年)掲載アイヌ関係記事：目録と紹介」『北海道開拓記念館調査報告』第 46 号、2007 年 3 月

関義央「不法行為による損害賠償請求権の除斥期間の起算点について―近時最高裁判決を題材に―」『千葉大学人文社会科学研究』14 号、2007 年 3 月。

植木哲＝関義央「小田急線連続立体交差（高架化）事業認可処分取消請求事件 最大判平成 17 年 12 月 7 日民集 59 巻 10 号 2645 頁」判例公害法追録 150 ＝ 151 号、2007 年 1 月。

植木哲＝関義央「周辺住民による一般廃棄物最終処分場建設差止請求につき、受忍限度を超える被害発生の蓋然性が高いとは認められないとして、請求が棄却された事例 福岡高判平成 15 年 10 月 27 日判タ 1168 号 215 頁」判例公害法追録 152 ＝ 153 号、2007 年 5 月。

平良智子・田村雅史他編『四宅ヤエの伝承』『四宅ヤエの伝承』刊行会、2007 年 2 月。

北原次郎太「樺太アイヌの木製品における刻印・人面の信仰的意義―事例と考察」澤登寛聡・小口雅史編『アイヌ文化の成立と変容―交易と交流を中心として』法政大学国際日本学研究所、2007 年 3 月。

北原次郎太「『アイヌ』のうち【世界観】」『世界大百科事典 アイヌ関連項目集』平凡社、2007 年 4 月。

海田皓介 'The Usage of OE/EME agan and OHG eigun compared with OE/EME sculan and motan with their OHG/MHG Cognates' 『千葉大学文学研究科院生紀要 Ever Onward』創刊号、2007 年 2 月。

山崎良雄・高橋典嗣・松田哲「『地球探検隊』の試み ～塩原～」『千葉大学教育学部研究紀要』、55、2007 年。

高橋典嗣「スペースデブリ等の光学観測成果報告」『ASTEROID』、16(2)、2007 年。

金子信子「外国人居住者のリテラシー問題と言語管理－外国人相談所事例の分析」『言語政策』３、2007 年３月。

木村智哉「日本占領期のアニメーション作品に見る「敗戦」・「占領」とジェンダー表象」（文部省科学研究費基盤研究「家父長制世界システムにおける戦時の女性の差別の構造的研究」研究成果報告書、2007 年。

木村智哉〔書評〕上野千鶴子『生き延びるための思想　ジェンダー平等の罠』（岩波書店、2006 年）『イメージ＆ジェンダー 』、Vol.7、2007 年。

木村智哉〔翻訳〕ピーター・B・ハーイ「菊池寛と革新官僚と雑誌『日本映画』」『戦争と表象／美術　20 世紀以後　国際シンポジウム記録集』美学出版、2007 年。

犬塚康博「藤山一雄の初期博物館論―「五十年後の九州」の「整へる火山博物館」―」『地域文化研究（梅光学院大学地域文化研究所）』第 22 号、2007 年 3 月。

犬塚康博「対称の中の非対称―常呂川河口遺跡 15 号竪穴住居跡小考―」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第 16 号、2007 年 3 月。

角田季美枝「『場所の感覚』を活用した公共政策に向けて：『場所の感覚』の総合政策的検討プロジェクトからの触発」、倉阪秀史編『「場所の感覚」の総合政策的検討』千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第 153 集、2007 年 2 月。

角田季美枝「生態・文化地域主義と環境政策の新たな原則」倉阪秀史編『「場所の感覚」の総合政策的検討』千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第 153 集、2007 年 2 月。

角田季美枝〔書評論文〕デヴィッド・タカーチ『生物多様性という名の革命』、『千葉大学人文社会科学研究』2007 年３月。

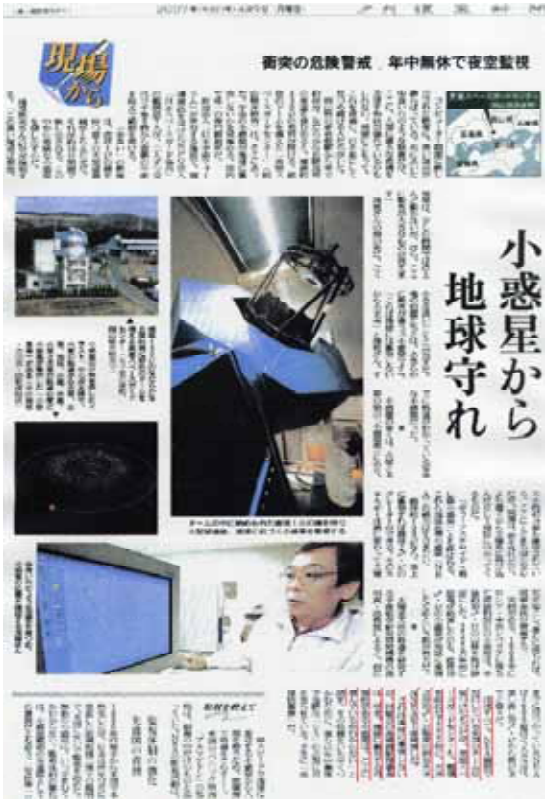
角田季美枝〔翻訳〕汚染を探せ、国際理解教育センター編『エネルギーと社会：子どもたちと地球を考えるエネルギー教育　Project Learning Tree「木と学ぼう」 Energy & Society + Prek-8 関連アクティビティ集』国際理解教育センター、2007 年 6 月。

角田季美枝「『場所の感覚』と『補完性原理』に関する考察：鈴木庸夫の２本の論文からの触発」、『公共研究』第 4 巻第 1 号、2007 年 6 月。

## メディア・報道

高橋典嗣（本研究科博士後期課程）
『読売新聞』2007 年 4 月 9 日夕刊（資料 3 参照）
『朝日新聞』2007 年 5 月 6 日「be on Sunday」

資料３


衝突の危険警戒　年中無休で夜空監視

現場から

小惑星から地球守れ

## 平成 19 年度前期全体研究会のお知らせ

平成 19 年 9 月 25 日（火）～ 26 日（水）の 2 日間にわたって開催されます。プログラムの公表は 8 月上旬に予定されておりますので、人社研・社文研ＨＰでご覧下さい。

人社研ＨＰ
http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~ghss/activity_general.html
社文研ＨＰ
http://www.shd.chiba-u.ac.jp/b_zentai.html

## 平成 19 年度紀要刊行予定

『人文社会科学研究（旧社会文化科学研究）』第 15 号が 9 月末に刊行されます。

『人文社会科学研究』第 16 号について
募集　　2007 年 10 月 15 日（月）
　　～ 11 月 15 日（木）午後 5 時
原稿締切　2007 年 12 月 13 日（木）午後 5 時
発行　　2008 年 3 月中旬
『投稿規定』『スタイルガイド』など詳細はＨＰをご覧下さい。

人社研ＨＰ
http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~ghss/students.html
社文研ＨＰ

## 大学院生研究室・貸与物品関連

2007 年 9 月に修了、退学、休学される方で、本研究科から院生研究室の固定席、ロッカーの鍵（博士後期課程のみ）、机の鍵（博士前期課程のみ）、書架、ＰＣ、校費コピーカードの貸与を受けている方は、**10月10日（水）までに**当該物品を指定の場所に返却、または私物を撤去してください。

**返却窓口**

ロッカーの鍵、机の鍵、校費コピーカード
……**大学院学務グループ窓口**
ＰＣ（博士後期課程）
……**人社研後期共同研究室**
ＰＣ（博士前期課程）
……貸与を受けた窓口

尚、**博士後期課程**の休学者のうち、学位請求論文を執筆中の方に限り、主任指導教員からの特例申請（様式はＨＰからダウンロード）があれば、ＰＣの継続利用が認められます。該当者は必ず申請をお願いします。

2007 年度後半期から復学される**博士後期課程**の大学院生の方で固定席、物品等の貸与を希望される方は**2007年9月3日～10月10日**に申請書を後期共同研究室（＝旧助手室）にご提出ください。様式はこちらです。
http://www.shd.chiba-u.ac.jp/%7Eghss/students.html

## 大学院学務グループからのお知らせ

大学院学務グループ窓口前の掲示のうち特に重要なものは統合メールシステムの「通知版」にも掲載することにしました。学外からもアクセスできますのでご利用ください。

統合メール（ログイン）
https://cuacmsrv.chiba-u.jp/am_bin/am_main.cgi/login

ログイン後、「通知版」のタブを選択し、「大学院生通知版」をクリックしてください。